

『ネメシス』

著：山藍紫姫子

iii：ライトグラフⅡ

一言で表せる言葉を探した桜庭は、ほとんど無意識の動作で、数メートル先にある一四〇四号室へ視線を向け、驚きのあまりに立ち竦(すく)んだ。

「なに？」

気になったルキヤが、桜庭の視線の先を見て、同じく驚いた。

まさにいま、二人が話題にしていた一四〇四号室のドアが、開いたからだ。

「前金で渡しといた方がいいな……」

一四〇四号室の室(な)内(か)から、鷹司でもドールでもない若い男の声が聞こえ、静かな廊下に響いた。

声の主が、室内の誰かと話しながら廊下に出てくる寸前で、桜庭はルキヤを連れてエレベーターの前に立った。

とはいえ、エレベーターホールは廊下の中心にあるため、隠れようもない。どうやってもお互いの姿は見えてしまうのだが、それでもごく自然に、一般客を装おうとしたのだ。

「…おい、その前金を忘れてるぞ。わたしに持たせるつもりか？」

続いて、現在はマカオに滞在しているはずの鷹司貴誉彦の、——いまだかつて桜庭が耳にしたこともないような、親しげな声が聞こえた。

「持ってきてよ」

甘えた面倒くさげな声に、親密な者同士の気安い調子で、鷹司が応じた。

「いつもいつも、お前にはいいように使われている気がするな」

「なに？ いやなの？」

不機嫌な声をだした青年が、鷹司の部屋から廊下へと出てきた。

プラチナブロンドの髪、襟に毛皮の付いた黒いロングカーディガンにジーンズとブーツといったラフな服装が見えた。

「外国人なのか？」そう桜庭が思った時、声とは裏腹の笑みを浮かべた青年が、顔面(おもて)をあげた。

すぐさま、桜庭は貌(かお)を背(そむ)けたが、もう一度振り返って青年を眺(なが)めたいという欲望を忪(こら)えるのに、汗ばむほどの努力が必要となった。

青年は、悪魔が人間を誘惑するために化(け)身(しん)したとしか考えられないほど、恐ろしいまでに美しい容姿(すがた)をしていたからだ。

そのうえに、全身から強い光輝が放たれているかのようにも視(み)えた——気がした。

「嫌とは言っていないぞ」

続いて、笑いながら出てくる鷹司の声が聞こえた。

「いつでも、お前の我が儘(まま)に振りまわされながら、仰(おお)せの通りに働いているだろう」

鷹司が廊下に出てきたのが判った瞬間、もう桜庭は忪(こら)えきれなくなり、二人を

盗み見てしまった。

そこには確かに、グレンチェックのシングルスーツを纏(まと)った鷹司本人がいて、どこからどう見ても——人としても男としても、尋常(ふつう)ではない美青年の腰に腕をまわして引き寄せ、歩きだそうとしていた。

龍星は、なかなか来ないエレベーターの昇降ボタンを押し続け、高校生風ルキヤは携帯メールに熱中する素振り、そして桜庭は直立不動で、歩いてくる二人と交差する瞬間を迎えた。

鷹司の方は、小型鞆を持って部屋から出た時に、廊下の先に桜庭が見えたが、まったく動じなかった。

いまも、美青年と睦(むつ)まじげに身体を寄せあったまま、エレベーターホールに立つ桜庭たちとすれ違う時も、完璧に無視してやり過ごし、星河の部屋へと向かっていった。

ホテルのチェックイン時刻と重なり、混みあっていたエレベーターがようやく十四階につき、桜庭たちは乗りこんだが、誰もが無言だった。

本文 p50～52 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>